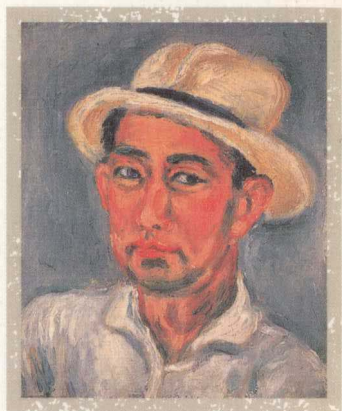


阪田寛夫

ノンキが来た

詩人・画家 宮崎丈二



新潮社

新潮社

ノ ン キ が 来 た

詩人・画家

宮崎大二

阪田寛夫

ノンキが来た

— 詩人・画家 宮崎丈二 —

一九八九年一〇月一〇日印刷

一九八九年一〇月一五日発行

著者 阪田寛夫

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号一六二

電話（業務部）03—二六六—五一一

（編集部）03—二六六—五四一一

振替 東京四一八〇八

印刷 大日本印刷株式会社

製本 株式会社大進堂

価格はカバーに表示してあります



© Hiroo Sakata 1989,
Printed in Japan

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお替えいたします。）

ISBN4-10-360402-6 C0093

ノンキが来た

——詩人・画家 宮崎丈二——

装画
宫崎文二

壁のまんなかにかけてあるその画の中からこちらを見下ろしている帽子の青年は、明るすぎるほど明るいのが特徴だった。

彼はバスト・サイズながら実物大で、その上特別頑丈な額縁に入って、私の家の食堂兼客間に居間を兼ねた部屋の一方の壁面にかかっている。兼用だらけの団地アパートの六畳分の部屋の、隣家との境界を兼ねた壁が、そのため一層せまく見える。この家では必ず食卓に坐ることになる客人たちは、それゆえ頭上の先客を仰ぎ見ずにはおられない。初めての客の何割かが画家の名を尋ねた。画家の名は宮崎丈二、人物もその人自身ですと答えると、客は大たいあいまいにうなずき、それきり話題を変えてくれる。

稀には宮崎がいかなる画派に属し、主としていつごろ活躍したかと問う客がいる。答えて、岸田劉生の影響下に大正八年草土社の社友となつたほかは、ひとりで描いていたらしい、と教わつた通りに繰返す。なるほどこの顔色は草土社だとうなづく人もいた。自画像の顔が、劉生の代表作「切通之写生」の掘りたての赤土の色そのものだと言ふのだ。

実は草土社社友という経歴を教えてくれた人から八年前にこの画を貰つた。ふだんから口の重いその人が、ある日とつぜん角ばつた大きな包みをかかえてきて、理由も抜きに、

「これ、しばらくお宅に掛けておいて下さいませんか」

と言つたのだ。それが始まりだ。重さに堪える鎖まで用意してくれていたから、否応もない。隣家の居間に突きぬけないように用心しながら、天井際の横棧に打ちこんだ五寸釘に太い鎖をひっかけると、重い画がゆらりと宙に浮いた。黄ばんだバナマ帽をあみだにかぶつた、胸から上だけの男と、その時初めてまともに対面した。

とにかく明るい人だが、やさ男ながら、壁の上から帝王のごとく狭い部屋を支配し、こちらから見て右側、先方にとっては左側ばかりを執拗にのぞいている。その横目の視線と、「切通」色の両頬が気になつて、最初は画よりもむしろ全重量の半ばを占めそうな褐色の額縁の方にまだしも親しみが持てた。知人は、遺作展の最後に残つたこの一枚を買つた時、大きな額縁も、画家が若い頃小笠原の母島滞在中、自分の手で作つたと画廊の主人から聞いていた。自画像も、もちろんその島で描いたと解してよからう。

朱色の頬の若者は、完成した絵姿を自分の小屋の画架に立てかけたまま、——その小屋はニッ

バ椰子の葉で葺いただけのものと私は勝手に思い込んでいたが、鉦一丁を手に島の密林に分け入って樹を伐り、先ず気根や、毛の密生した樹皮をそぎ落して日蔭に乾し、長い月日をかけて手製の合板を額縁に仕立てた。丹念な素人細工の頑丈さは、若者が遙かな昔、南の淋しい島に確かに暮っていた痕跡に他ならぬ。微かな共感が湧いた。これからせまい家の同居人として、顔を突きあわせながらうまくやって行かねばならない人物の背後に、檳榔樹とかガジュマルといった亜熱帯の森の風、気化した樹液の匂をとることで、私はすこし心安らいだ。

言い忘れたが、帽子が目立つだけで着衣はごく地味な白の半袖開襟シャツの宮崎丈二氏は、白樺派の詩人でもあった。そのことも同じ知人から教わった。言われてみると、いかにも白樺派風の高雅な顔だちに見えてきた。名前に心当りが無い点に変わりはないが、私はあみだのバナマ帽からごく自然に、その派の中心人物だった武者小路実篤のレンブラント自画像への讃を思い出した。

レンブラント！

お前は立つてゐるな！

耐へて耐へて立つてゐるな。

帝王のやうに、

一人で。

そのあとに、「帽子を阿弥陀にかぶつて」の一行がくる。画中の宮崎丈二の方は二の腕から先が見えず、従ってその両手が果たして「しつかと」腰にあてられて、元氣旺盛な日本の即興詩人から、

お前は立つてゐるな！

と呻かれるような立ち方であるかどうか分らないのが残念だが、少なくとも帽子のかぶり方だけは巨匠と同じあみだなのだった。たぶんこの詩、あるいはこの詩を書いた武者小路の影響力を通じて、わが宮崎丈二もどうやら時空をつらぬいて泰西の大画家と向き合つて立つた気分らしいと、私は判定した。

そのうち宮崎さんの詩のコピーを送つてあげると約束して歸つていった知人から、三週間後に手紙が届いた。「日常生活」ほか数篇が載つた昔の雑誌の複写が同封されていた。すべて大正十二、三年の作品だった。

この平野と天空

私に缺けてゐる何があらう

さうして消えて行く日々は

私の詩のうちに跡をとどめて行く

この上私は何を望まう

（「日常生活」より）

私が初めて読んだ宮崎丈二の詩はこのように書き起されていた。それにしても素朴だ、と思つた。たとえば、のちに「平野と天空」と改題されたこの詩にうたわれた詩人の日常生活は、おおむね次の通りだった。

朝はほがらかな薔薇色の空に明けそめ、花や木々に囲まれたささやかな家に、爽やかな風が窓から吹きこむ。健やかな睡りからさめた「私」は、一日の平和とその喜びとに敬虔な祈りを捧げ、

「木々と花とあらゆる小径と天空と」を友に散歩に出かける。これが日課であつて、従つて「私の一生は、右にかかげた「散歩の友」たちの健やかさ、優しさ、美しさのなかに編みこまれて行く。——大正十二年発行の雑誌のなかで、恐らく十代か二十代の青年がこう宣言している。

毎日それだけ歩けば血色も良くなる筈だが、健康なのは外見だけではない。要約してみて分つたが、今の詩の常識から見て致命的に形容詞が多く、それらはすべて純真素朴で世界への好意に満ち、明るく周囲を彩らぬものはない。この詩人兼画家は、心もしくは頭の内側まで血のめぐりが良くて桜色なのだった。彼に無縁なのは、難解な言葉、病的な比喩、屈折、気取り、予測できない突然の飛躍などである。私の俗見で今どきの詩の属性だと考えられるような要素は、一つもここには混じつておらず、その分だけ明るさが詰まつている。

もう一つ目につくのは、「散歩詩人」と名付けてよいほど、天地自然の中を歩く詩が多いことだ。叙景の詩を数に加えれば、送られてきた詩篇のすべてが散歩の所産と言つてよかつた。何故ともなく心たのしく喜ばしく

朝の緑の小径を歩く

吹きぬけて行く爽かな風

揺らぐ若葉

垣根越しに見る他人の家の幸福な様も

喜ばしい

自分のことのやうに

（朝の散歩）

最初「白樺派の詩人」と聞いた時、明治末期に雑誌『白樺』に集まった学習院の貴公子の一人
と思ひこんでしまつたが、これは早合点だつた。生まれた年代もずっと若いあみだ、帽子の宮崎丈
二は、ただ詩の塩梅が武者小路実篤風、とみなされているに過ぎないらしかつた。

そこで、私の読んだ限りの七篇の宮崎丈二の詩を、ずいぶん荒つぽい比較だが、武者小路の、
やはり私がそらんじている有名な詩、

この道より

我を生かす道なし

この道を歩く。

(「この道より」)

と並べてみた。いま武者小路(の詩)を「一周おくれのランナー」として見直そうという詩人
荒川洋治は、彼の作品が現代詩の世界ではあらかたこんな見方をされている、という但し書き付
きで左の定義を下した(「実篤のいるスタジアム」)。

①野暮である。

②のんきである。

③単純である。

④だが自我の強烈なビート!

中でも第四項は忘れてはならぬ、とある。私見によれば、「白樺」以後、自我は普及して現代
では病氣の一種だが、わが宮崎丈二と武者小路実篤のいちばん大きな違いも、すでにその項目に
あつた。

詩も画も、格別好きにも嫌いにもならないまま歳月をすぐす間に、震度三か四に達する規模の地震が何度かあった。それでも重い白画像は自若としていつも無事で、従って一度壁に吊したきり数年間手も触れずに、その前で最初は遠慮していた夫婦喧嘩も盛大に再開するようになった。もしこれが武者小路の肖像なら、多少は忸怩たる思いを持たずにおられなかったところだ。

客のなかでごく稀に、あれは君の似顔かと聞く人がいた。こちらは二十代半ばの青年の白画像と思い込んでいるから、画中の人物がそんな年配者に見えるのかと、逆に驚いて訊ね返したこともある。

「そういうば、はたち過ぎの顔かな」

と、その時は先方も納得した。実はその年代の想定が、これから二転、三転することになるのだが、画を壁にかけてこのかた満六年になろうという冬のはじめ、送られてきた古書目録を何気なくひらいて繰っているうちに、宮崎丈二という文字に目がとまった。

詩集『爽かな空』宮崎丈二

『評伝 無冠の詩人宮崎丈二』

二冊も並んでいる。評伝の著者は未知の人で、高橋留治とある。ためらわず注文の葉書を出して三日後、小包が届いた。大小二冊の本が入っていた。思いきり小型の、ポケットにでも入りそうな詩集は、大正十三年九月発行、本人装幀の凝りに凝った造本で、扉をめくるとまた扉が出てきた。それから白く不気味な「ライン・マスク」の写真、ただの白紙、武者小路実篤と千家元麿への献辞のページ、それだけあって、ようやく「序」になった。

この宇宙間に在つては、塵にも等しい人間の、その悲喜を通して自分は遥かに大なるもの、我等の力となり希望となり清い喜びとなり優しい慰めとなるものを求めて、努めた。それがこれ等の詩だ。……

「塵にも等しい人間の」というところを、私は力をこめて読んだ。各ページ上端に刷り込んだ細かいカットを虫眼鏡でよく見ると、矩形の小さな枠のなかに、雲と山と木々、さらにその間に蛹のような人間が描きこまれていた。しかし、百六、七十篇にもものぼる中身の方は、先に雑誌の複写で読んだものと変りなさそうな、形容詞と祝福と意見開陳の多い詩で、軽く目を通して本棚にしまった。

一方、本文五百四十ページ、索引・複製画付き函入り固表紙本の評伝の方は、値段が安いわりに目方もかさも非常に大きい。著者は、戦後銀行員だった頃友人の紹介で宮崎丈二に会い、「忽ち尊敬を覚え」たことから付き合いを始めた、丈二の画業のよき理解者、後援者の一人だが、詩の弟子でもあった。彼が自費を投じてこの大著をものしたのは、ひとえに宮崎丈二という詩人を世に知らしめたいからだという。

「世上の伝えるところ、白樺派傍系に属する著名詩人としては、千家元麿ひとりしか存在しなかった感さえうける」（高橋留治、同書）

時には佐藤惣之助や中川一政をそこに加えた記述もあるが、宮崎丈二に触れている詩史は、わずかに三好達治が、日本現代詩大系の解説に、あたかも千家に隸属していた小詩人であるかの如く記している程度、である。

「宮崎丈二は大正・昭和の詩壇から完全に抹殺された存在と化しているのが、現状一般認識であろう。（略）本評伝は、どうしてそのような扱いをうけるようになったもののかの疑問に対し、丈二芸術の軌跡を辿りて尋ね、併せて、どうして隠棲したかの根源を探ろうとする私の一試論でもある」（同右）

このような熱烈な讃美者が、少数ながら宮崎の周囲にいたことを、他ならぬこの評伝によって私は知った。

すぐにも著者に導かれて、その師の芸術の軌跡、根源を探る旅に同道するのが礼儀というものだろうが、何しろ本が大きく厚く、加えて評伝というより、前半は宮崎丈二への誠実な頌歌、後半は既に刊行されているらしい「全詩集」に対する実に丹念な拾遺集の観があり、私は怠けて先ず一番気になる些細な事実だけを調べた。それは宮崎が小笠原の母島へ行ったときの年齢——つまり、自画像の青年の歳を知ることだった。

お蔭で知り得たそこまでの経歴をざっと言えば、明治三十年（一八九七年）一月銚子に生まれた宮崎は、大正五年東京の京華中学を卒業後、翌年、つぎつぎ二つの私立大学予科に入っては中途退学を重ねるうち、武者小路実篤の影響下に年長の千家元麿・木村莊八らと回覧雑誌を始める一方、岸田劉生の影響下に油絵を描いて草土社社友ともなった。それが二十一、二歳の頃か。間もなく胸を病んで三崎で静養、さらに母島へ渡った。小笠原行きが大正九年だから、丈二は二十三歳。とすると、画の中の青年は二十三、四歳だった。そこまで分って安心して、厚い本を小さな詩集の隣に藏った。

年を越して春が近づいた頃、本棚を整理しながら、何げなく評伝の方を函から出してひらいてみた。あけた右側のページに、眼鏡をかけて和服を着た、七十歳の宮崎丈二の室内写真が載っており、その右肩上の壁にかかっている画が一寸気になった。何かに似ているのだ。こちらは何気なく手にとったままの姿勢だったから、そこで坐り直して机の上にひろげて見た。わが目を疑うとはこういう時に使う言葉だろう。念のため、もう一度虫眼鏡で拡大して見直した。間違いなく、それはいまわが家の壁に浮いている画それ自体であつた。

現金なもので、これまでは所有者の目で気易く眺めてきた画も、印刷された本のなかで間接的に再発見すると、何やらなつかしく、一段格が上ったように見えだした。そしてここまで疎遠のままんでいた、めつぽう明るい画家兼詩人の世に隠された生涯を、前後の見境なく、小説に書こうと発心してしまったのだ。

そこから先は速かつた。評伝の記述に導かれてやみくもに銚子の町に出かけると、よもや会えるとは思われなかった九十歳近い未亡人の消息がその日のうちに判明し、しかもいきなり訪ねて、快く話を聞かせてもらうことまでできた。更に重ねて銚子を訪ねて、目方にして約三十キロの日記の借用が許され、続いて死後刊行された「全詩集」や、故人が主宰した月刊の同人誌十四年分全冊の所在も分つて、それぞれの場所で閲覧できた。更に故人の画、有名な文人たちや無名の恋人からのかなりの量の書簡のコレクションにも接しえた。つい先ほどまで未知の人だったのが一転して、もはや一氣に進めば足りる氣運がひらけた。

私は私の詩を

この波の音に合はせようと思ふ

私は私の詩を

まだ濡れてゐるこの波打際の水鳥の足跡に合はせようと思ふ

（海辺で）

本人の語るところに従えば、彼は自然を「充ちて来るままに」心のうちに充たすことを喜べる人、つまり、自分の内側に予め何も持たないで、あるがままの運命を感謝して受け入れられる人らしかった。

ところが一つ、何でもなふしぎなことでもつまずいた。明治三十二年生まれでその時八十八歳だった宮崎夫人の寓居を探しあてた夕方、先ず評伝に掲載された写真の中の壁面の画が、今私の家にかかっている事情を告げて、その自画像が描かれた年代を訊ねたら、

「あれは眼鏡をかけている晩年の作です」

と言われたのだ。しかしその時は、眼鏡をはずして描きましたと、補足して答えたほどだから、記憶にはつきり残っていたのだらう。額縁はたしかに母島の椰子の木で作ったものだが、自画像は晩年の姿だという。これには弱った。せいぜい二十五歳くらいまでのお顔かと思っていましたと伝えると、

「見た目に若い人です。七十三で亡くなりましたが、どなたも五十くらいと言われたほど若かったのです」

と、こともない。ただし老夫人は物を言うときそれだけ息が足りなくなつて苦しげで、あまり一つのことをしつこく訊ねるのは憚られたから、「晩年」が正確に何歳を指すのか問いたださずに

終ったものの、たとえ六十歳の年の自画像でも二十何歳とは大違いだ。自分の勝手な見立て違いながら、薄気味悪くなった。夫人の語調では東京から最後の棲家の銚子へ移って以後の作品のよりに聞えたが、それなら六十八歳からあとの姿になる。

夫人は小笠原の父島に育ち、母島に一家で移り住んでから、島へ保養に來た宮崎丈二とめぐり逢った。その恋をうたったらしい詩も、処女詩集にいくつか残されている。それも確認したいことの一つだったから、順番に作品を示して訊ねてみたが、

「それはちがう女です。私ではないんです」

と、はっきり否定する答が幾つも返ってきたのも強く印象に残った。

美しい人よ

あなたの前では

自分なぞは

實に取るに足らない者だ

(「美しい人よ」より)

という詩も、

「そんなのも東京です」

と言われて、とりつく島がない。

「それはあたくしのことです」という答が初めて返ってきたのは、次の六行詩だった。

微風が耳元で羽搏く

さゝやくやうにたのしく